



Title	マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって (1)
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 4, p. 279-301
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79524">https://hdl.handle.net/11094/79524</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の 第三～第六章をめぐって(1)

竹 田 新

### I はじめに

筆者はアラビア語の特に9～10世紀の地理書に关心を持つ者として、マスウーディー al-Mas'ūdī の書『黄金の牧場と宝石の鉱山』*Mu'rūj adh-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar* (以下、『黄金の牧場』と略記)<sup>(1)</sup>を“国々の奇事の学”の代表例として位置付けてきた<sup>(2)</sup>。しかしこの書はあくまで歴史を扱った作品であり、その中に地理が取り込まれているのである(ヘロドトスの『歴史』に似ていなくもない。この2世紀ではこうした例は al-Maqdisī の歴史書<sup>(3)</sup>にも見られる。他方、Ibn Khurdādhbih や al-Ya'qūbī は歴史書と地理書<sup>(4)</sup>とを別個に著している)。

本稿では、『黄金の牧場』の最初の歴史記述たる第3～6章の翻訳を通じて、本来の歴史書としての面を考えてみる。この書は、9～10世紀を代表するタバリー at-Tabarī の史書『使徒達と王達の歴史』*Ta'rikh ar-Rusul wa'l-Muluk*<sup>(5)</sup>に見られる編年体とは異なり、主題別にまとめた作品である。また、明らかにシーア派から見た歴史であり、シーア派的傾向要素の強いIbn Hawqal や al-Muqaddasī による10世紀の優れた地理書<sup>(6)</sup>をより良く理解するためにも大いに参考になる作品でもある。因に、かのイブン・ハルドゥーン Ibn Khaldūn によって、この『黄金の牧場』は“歴史家のための基本的参考書となり、歴史的情報を確かめるための主要な拠り所となった”書物との評価を受けている<sup>(7)</sup>。

本稿は、まず、マスウーディーの現存する2作品『黄金の牧場』と『提言と再考』*K. at-Tanbih wa'l-Ishrāf*に基づき、彼の生涯、次いで、彼の作品について言及し、その後、各章の翻訳とその解説に進む。『黄金の牧場』には数多くの写本があるが、本翻訳では、Barbier de MeynardとPavet de Courteille の校訂版に基づく Charles Pellat による改訂版(5 vols, Beirut 1966～74)を底本とする<sup>(8)</sup>。

注

以下で使用する略号は次の通りである。

*Prairies d'Or: Maçoudi, Les prairies d'or, Texte et traduction par C. Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, tome. I ~IX, Paris, 1861~77*

*Murūj: Murūj adh-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar*, revised and corrected edition by Charles Pellat, 5vols. Beirut, 1966~74

*Tanbīh: K. at-Tanbīh wa-'l-Ishrāf*, ed. M.J. de Goeje, Leiden, 1894

*'Ibar: K. al-'Ibar wa-Dīwān al-Mubtada' wa'l-Khabar fī Ayyām al-'Arab wa'l-'Ajām wa'l-Barbar wa-Man 'Āṣara-hum min Dhau'ī as-Sūlṭān al-Akbar*, 7vols, Beirut, 1956~61

(1) K. Murūj adh-Dhahab wa-Ma'ādin al-Jawhar fī Tuḥaf al-Ashrāf min al-Mulūk wa-Ahl ad-Dirāyat 『王や識者で貴い者達への贈り物における黄金の牧場と宝石の鉱山』というがフル・タイトルかも知れない (Tanbīh pp.2, 329; as-Sakhāwī (d.903A.H./1497A.D.), al-I'lān bi-t-Tawbīkh li-Man Dhamma Ahl at-Tawrīkh, English tr. Franz Rosenthal, *A History of Muslim Historiography*, Leiden, 1968 (2nd ed.) p.489; cf. Ibn an-Nadīm (d. after 377/987), *K. al-Fihrist*, ed. Gustav Flügel, Leipzig, 1871~72, p.154)。

(2) アラビア語の地理文献について (II : 西暦10世紀――1) ; 外国語・外国文学研究 8号 (1984) pp.38~52

(3) al-Maqdīsī (355/966年以後没) の歴史書は『創始と歴史』*K. al-Bad' wa't-Ta'rīkh*。

(4) Ibn Khurdādhbih [或は Khurraqādādhbih] (272/885年以後没) の歴史書は現在は不明であるが、マスウーディーが『黄金の牧場』で、その存在に言及している (*Murūj*, § 9, § 503) 他、マクディスィーの『創始と歴史』には、この書の引用が登場する (ed.C. Huart, Paris 1899~1919, II, 151, VI, 52, 89)。他方、地理書は『諸道と諸国』*K. al-Masālik wa'l-Mamālik*。また、al-Ya'qūbī (284/897年没) の歴史書は『歴史』*at-Ta'rīkh*で、地理書は『国々』*K. al-Buldān*。

(5) 以下、タバリーすなわち Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr at-Tabarī (310/923年没) のこの史書を『黄金の牧場』との比較に用いる。

(6) Ibn Hawqal (378/988年以後没) の地理書は『大地の姿』*K. Ṣūrat al-Ard*。他方、al-Muqaddasī (380/990年以後没) の地理書は『諸州の知識に関する最良の区分』*K. Ahsan at-Taqāṣīm fī Ma'rīfat al-Aqālīm*。

(7) 引用はイブン・ハルドゥーンすなわち Abū Zayd 'Abd ar-Rahmān b. Muḥammad b. Khaldūn (808/1406年没) の歴史書『実例の書』 ('Ibar) からである (vol.I, p.52)。アラビア語では、この部分の主語が3人称・男性・単数の代名詞なので、解釈によっては、『黄金の牧場』ではなく、マスウーディーが主語ともとれる。B. de Meynard などは、マスウーディーと解釈する (*Prairies d'Or*, t.I, p.VII; cf. R.A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs*, Cambridge, 1907, p.353, note3; etc.) が、筆者は F. Rosenthal の英訳 (Ibn Khaldūn, *The Muqaddimah, An Introduction to History*, vol.I, Princeton, 1958, pp.63~64) と森本公誠氏の邦訳 (イブン=ハルドゥーン著 歴史序説 第一巻 岩波書店 1979 66頁) に従った (以下、引用箇所は森本公誠氏の邦訳をお借りした)。

(8) B. de Meynard と P. de Courteille は (1) パリの旧王立図書館 (la Bibliothèque Royale) 写本 n°714, (2) 同 n°598, (3) 同 n°579, (4) パリのアジア協会 (la Société Asiatique) 所蔵の或る写し、(5) ライデン図書館写本 n°537, (6) 同 n°282を用い、Ch. Pellat は新たに (1) カイロのタイムリーヤ (at-Taymūriyya) 写本 歴史 n°1573 [ヒジュラ暦1035年の筆]、(2) メッカ写本 歴史 n°112 [ヒジュラ暦629年の筆] を加えている。この二つの校訂版に利用されていない写本には、イスタンブルの Aya Sofya n° 3407~09, Fatih n° 4481, Feyzullah n° 1372, Hekim n° 802, Nur Osmaniye n° 3421, Reisülküttap n° 707を始め、フェズの al-Qarawiyīn n° 568, ミュンヘン n° 374~75, 等々、少なくとも20種類以上はある。詳しくは、F. Sezgin, *Geschichte des Arabischen Schrifttums*, Band I, Leiden, 1967, S.334~35, を参照。

なお翻訳には、上記の Meynard と Courteille によるフランス語訳がある (*Prairies d'Or*) 他、Pellat によ

る訳が進行中で、現在116章までが出版されている（*Mas'ūdī, Les prairies d'or. Traduction Française de Barbier de Meynard et Pavet de Courteille. Revue et corrigée par Charles Pellat. tome. I ~ IV, Paris, 1962~89*）。また英語による108章以下の部分訳もある（*Paul Lunde & Caroline Stone The Meadows of Gold The Abbasids by Mas'ūdī, London, 1989*）。その他、Aloys Sprenger : *El-Mas'ūdī's Historical Encyclopaedia Entitled "The Meadows of Gold and Mines of Gems," vol.1 (1841)* という、最初の17章の英訳もあるようだ。

## II マスウーディーの生涯

『黄金の牧場』の著者マスウーディーは、自身の名を *Abū al-Hasan 'Alī b. al-Husayn b. 'Alī b. 'Abd Allāh al-Mas'ūdī* と言っており、ニスバ（nisbah, 由来名）の *al-Mas'ūdī* は、彼が預言者ムハンマド（Muhammad）の高名な教友の一人イブン・マスウード（'Abd Allāh ibn Mas'ūd）の子孫であることを指し示しているようだ<sup>(1)</sup>。

また彼は *al-Hudhalī* というニスバでよばれることもあり、北アラブの有力部族フザイル（Hudhayl）部族に属するのではなかろうか。実家はイラーク（al-'Irāq, 南メソポタミアで、現イラクの北部を除く）のクーファ（al-Kūfah）にあったらしいが、彼は平安の都バグダード（Madīnat as-Salām）で生まれたと思われる<sup>(2)</sup>。

マスウーディーはヒジュラ暦300年/西暦912年にアッバース（al-'Abbās）家に属するある老人がバグダードで彼に語ったある歴史逸話を記録したそうだが、それまでのことは不明である<sup>(3)</sup>。

3年後、303/915~16年、ファールス（Fāris, イラン南西地方）のイスタフル（Iṣṭakhr, 旧ペルセポリス）においてペルシア人（al-Furs）名家が所有するペルシアの学問や歴史などに関する書物を調べた他、この町やジュール（Jūr, 後のフィールーザーバード）の古い拝火教徒（al-Majūs）の神殿を訪れたようだ<sup>(4)</sup>。恐らくはこの時、ペルシア諸地方（arḍ al-A'ājim）を巡り、ゾロアスター教の学者達からこの宗教の知識を得たり、ホッラム教徒（al-Khurramiyyah）、マズダク教徒（al-Mazdaqiyah）、マニ教徒（al-Māhāniyyah）等と討論を行なったりしたのではなかろうか<sup>(5)</sup>。更にホラーサーン（Khurāsān）頭部のバルフ（Balkh, 現在は廃墟でアフガニスタン領内）で、中国（aṣ-Ṣīn）に何度か陸路で行った者から話を聞いたのも、この頃かも知れぬ<sup>(6)</sup>。

同年、バスラ（al-Baṣrah）で彼はファールス地方の大港町スィーラーフ（Sīrāf, 現在は廃墟）出身の学識ある大商人 *Abū Zayd as-Sīrāfī* に会い、インド（al-Hind）や中国、東海の情報を得た後、今度はシンド（as-Sind, インダス流域）を通って、インドへ向かった<sup>(7)</sup>。シンドでは北のムルターン（al-Multān）や南のマンスーラ（al-Manṣūrah, 現在は廃墟）を訪れ、後者では大臣一家や身分の高いアラブ人に会った他、王の所有になる2頭の象を目撃した<sup>(8)</sup>。そして翌304/916年にかけて、ラール（al-Lār）の地（おおよそ、現在のボンペイ地方に当たる）に

潜在した<sup>(9)</sup>。当時、この地はバッラハラー（al-Ballaharā）という称号で呼ばれるマーニヤケータ（al-Mānkīr）の王が支配する国—イスラム世界の外にある、ラーシュトラクータ王朝—の宗主領であった<sup>(10)</sup>。マスウーディーはチャウル（Şaymûr）では数多くのムスリムの商人と名士に会い、キャンベイ（Kanbâyah）ではマーニヤケータ王に代わってこの地を治めるバラモン（Brahman）と宗教論議を行ったようだ<sup>(11)</sup>。彼はインドの歴史や宗教の他、その自然にも深い関心を示している<sup>(12)</sup>。

マスウーディーは同304/916-17年、オマーン（‘Umân）からスィーラーフの船に乗り、東アフリカの Qanbalû 島（ペンバ島か）を訪れ、その年のうちに再びスィーラーフ船でオマーンに向かった<sup>(13)</sup>。その後、バスラで、当時のカーディー（qâdî, 法官）で歴史家でもあった Abû Khalîfah al-Jumâhî（305/917年没）の下で学んだり、306/918年には、バグダードで、シャーフィー派の（Shâfi‘î）著名な学者 Ibn Surâj（306/918年没）の会（majlis）に出席するなどして、何年かをイラクで過ごしたのではなかろうか<sup>(14)</sup>。

309/921年、彼はアレッポ（Halab）で、当地のカーディーを勤める、バグダードで面識の有ったザーヒリー派の（Zâhirî）法学者 Ibrâhîm b. Jâbir（310/922年没）に会った<sup>(15)</sup>。これがあるいはシリア（ash-Shâ‘m, ユーフラテス流域より南で、現レバノン、イスラエル、ヨルダンも含む）への初めての旅であり、ムスリムに改宗したギリシア人提督“トリボリ（Tarâbulus）のレオ（Lâwun）”から地中海に関する詳しい情報を手に入れたり、ビザンツとの国境地帯（ath-thughûr）の要人で、マスウーディーが後にも数回会うことになるアダナ（Adanah）出身の Abû ‘Umâyr b. ‘Abd al-Bâqî（337/948年没）からこの国境地帯とビザンツ帝国に関する知識を獲得するのも、この旅行においてかも知れない<sup>(16)</sup>。

313/925年には、イラク北部のティクリート（Takrît）にある“緑の教会”（al-Kanîsah al-Khaḍrâ'）で、キリスト教ヤコブ派（al-Yâ‘âqîbî）の学者 Abû Zakariyyâ' Dâkhâ と三位一体などについて議論を戦わしている<sup>(17)</sup>。モースル（al-Mawṣil）近郊で、著名な法学者で文人 Ja‘far b. Hâmdân al-Mawṣilî（323/935年没）に会見したのもこの時期だろうか<sup>(18)</sup>。

315年12月/928年2月には、シリアからユーフラテス川（al-Furât）を下ってバグダードに戻る途中、ヒート（Hît）の町でバハレーン（al-Bâhîrâyn）のカリマト派（al-Qarâmiṭâh）による包囲を目撃し、この派の指導者達や宣伝員達とも会っている<sup>(19)</sup>。北のハッラーン（Harrân、現在は廃墟でトルコ領内）とラッカ（ar-Raqqâh）に足を運び、ハッラーンでは Mâlik b. ‘Aqbûn 他のサービー教徒達（aṣ-Ṣâbi‘ah）と交わり、彼らの集会所を訪れ、ラッカでは当地のユダヤ教徒（al-Yahûd）コミュニティーと接触し、Yahûdhâ b. Yûsuf（Ibn Abî ath-Thanâ'）と Sa‘îd b. ‘Alî（Ibn Ashlamiyâ）と言う2名のユダヤ教徒学者と議論を戦わしたのは、その前のことではなかろうか<sup>(20)</sup>。その後、バグダードから再びフーズィスタン（al-Ahwâz）とファールスを訪れ、317/930年に発生したサーマーン朝の將軍 Asfâr b. Shîrwayh とシーア派の宣伝員（dâ‘î）al-Hasan b. al-Qâsim al-Hasanî との戦闘の模様を、レイ（ar-Rayy, 現テヘラン

の南) から来た人達に聞いた<sup>(21)</sup>。

既にこの頃までには、パレスチナ (Filastīn) とヨルダン (al-Urdunn) を訪れ、彼が Abū Kathīr Yaḥyā b. Zakariyyā' と呼ぶユダヤ教徒学者と交わり、ティベリアス (Tabariyyah) では、消滅したウマイヤ朝を賛美するムスリム学者とさえ会った<sup>(22)</sup>。また、ナザレ (Nāṣirah) のキリスト教会(恐らく、聖母教会) や、恐らくはイエルサレム (Bayt al-Maqdis) のアクサー・モスク (al-Masjid al-Aqṣā) や聖墳墓教会 (Kanīsat al-Qiyāmah (al-Qumāmah)) なども訪れ、サマリア人 (al-Asāmirah) に関する情報をナブルス (Nābulus) で集めたと思われる<sup>(23)</sup>。その他、ダマスクス (Dimashq) を訪れ、当地のカーディー 'Abd Allāh b. Zayd に会ったり、ウマイヤ・モスク (al-masjid al-jāmi') やウマイヤ朝の祖ムアーウィア (Mu'āwiya) の旧居と墓に足を運んだようだ<sup>(24)</sup>。

また、カスピ海沿岸 (Jurjān と Tabaristān) や、アゼルバイジャン (Ādharbayjān) とアルメニア (Armīniya) を訪れ、カスピ海と黒海が別個のものであることを確認した他、コーカサス以北に関する情報を集めた<sup>(25)</sup>。更には、当然のことながら、メッカ (Makkah) とメディナ (al-Madīnah) を訪れ、イエメン (al-Yaman) などアラビア半島の他地域にも足を伸ばしたと考えられる<sup>(26)</sup>。

330年の公現祭 (al-Ghiṭās) /942年1月6日には、彼はイフシード朝の Muḥammad b. Tughj al-Ikhshīd 統治 (323/935年–335/946年) 下のエジプト (Miṣr) のフスタート (al-Fustāt, 古カイロ) でこの祭を目撃し、同年、Muḥammad b. Tughj の宮殿において、エジプト西部のオアシス (al-Wāḥāt) 地方の情報を得ているが、マスウーディーがその宮中に入りするイフシード朝との関係は分からぬ<sup>(27)</sup>。

2年後、332年4月/944年1月には、フスタートで『黄金の牧場』の最初の33章 (873節まで) の草稿を書き終えたらし<sup>(28)</sup>。同年の夏はアンティオキア (Anṭākiyyah) の al-Qusyān 教会で、メルキト派 (Malakī, シリアのギリシア正教会派) キリスト教聖職者達と会い、経典類を調べている<sup>(29)</sup>。シリアの港町ジャバラ (Jabalāh) を訪れて、港を管理する提督の 'Abd Allāh b. Wažir に会ったのもこの時であろうか。更に、332/943年か333/944年にはバスラを訪れたかも知れない<sup>(30)</sup>。そして、334年12月/946年7月にはダマスクスで、当地も支配するイフシード朝の君主 Muḥammad b. Tughj と休戦と捕虜の身代金を取り決めるために Abū 'Umayr に伴われたビザンツの使節が到着したのを目撃した他、法学者の Muḥammad b. 'Abd Allāh からアッバース朝カリフ al-Muttaqī (329/940年–333/944年) の性格や治世中の出来事について聞くことができた<sup>(31)</sup>。

336/947年にはフスタートに戻っており、当地でヘロナ (Jarundah, 在カタロニア) の司教 Godmar (Ghudmār) の書の中にフランク人の王達の一覧表を見付け、同336年5月/947年11–12月には、『黄金の牧場』(初稿) を書き上げた<sup>(32)</sup>。この間に、アレクサンドリア (al-Iskandariyyah) を訪れて、住民からこの町の歴史を聞いた他、上エジプト (Ša'īd

Miṣr) へも出掛け、アスワン (Uswān) ではスンナ派の1法学派の祖シャーフィイー (ash-Shāfi‘ī) の生涯についての情報を得、イフミーム (Akhmīm) などではコプト (al-Qibṭ) に会って古代エジプトに関する情報を集めたようだ<sup>(34)</sup>。

344年9月18日/956年1月5日には、フスタートにおいて強い地震を体験し、翌345/956年、当地で『提言と再考』を最終的に書き上げたが、『黄金の牧場』の増補版も完成させていたらし  
い<sup>(35)</sup>。

彼が『黄金の牧場』と『提言と再考』を書き上げるまでに直接、間接的に教えを受けた知識人の中には、上記の他、歴史家・伝承学者タバリー (310/923年没)、歴史家・文芸評論家 as-Šūlī (335/946年没)、歴史家・文法学者・詩人 Wakī‘ (306/918年没)、文法学者・詩人 Ibn Durayd (321/934年没)、文法学者 Niftawayh (323/935年没)、歴史家 Muḥammad b. Sulaymān b. Dāwūd al-Minqarī、哲学者・科学者 Sinān b. Thābit b. Qurrah (331/943年没) などがあり、ムウタズィラ派の神学者 al-Jubbā‘ī (303/915年没)、同じく Abū al-Qāsim al-Balkhī (319/931年没)、シーア派の神学者 al-Hasan b. Mūsā an-Nawbakhtī (310/922年頃没) などとも面識があった。また、高名な臨床医で哲学者の ar-Rāzī (313/925年没) と、世界の発出 (ḥudūth) をめぐって討論したとも伝えられている<sup>(37)</sup>。

彼は12イマーム派を信奉し、ムウタズィラ派の神学に共感を持っていたらしい<sup>(38)</sup>。そしてシャーフィイー派の法学に従っていたのではないかと考えられるが<sup>(39)</sup>、彼は上記の3作品の他、法学、神学、歴史などに関する数多くの作品も著していたようだ。そして、マスウーディーは345年6月/956年9月に没した<sup>(40)</sup>。

マスウーディーはその生涯の大半を旅に過ごした。少なくとも303年から336年までの期間に、東方イスラーム世界の多くの地域を旅したが、西方イスラーム世界、即ち北アフリカとイベリア半島は訪れなかったようである。そして生涯の最後の約15年は、殆どをイフシード朝下のエジプトとシリアで暮らしている。故郷のイラクをいわば捨てた原因は、アッバース朝の政治的混乱にあったのではなかろうか。

彼の旅行は純然たる商業活動のため、或は12イマーム派の教義を広めるためではなく、学者達に会うことや非イスラーム社会を知ることに主たる目的があったのではないかと思われる。すると、彼はどのようにして生計を立てていたのだろう。恐らくは、旅の費用を賄うために、何らかの商取引に携わることがあったのではなかろうか<sup>(41)</sup>。また、彼がイフシード朝下で官職を得たという証拠もなく、マスウーディーの生活は謎に満ちている。

#### 注

更に、以下で使用する略号は次の通りである。

Miquel : André Miquel, *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11e siècle*, tome I, Paris-La Haye, 1967

Khalidi : Tarif Khalidi, *Islamic Historiography, The Histories of Mas'ūdī*, Albany, 1975

Shboul : Ahmad M H Shboul, *Al-Mas'ūdī & his World, A Muslim Humanist and his Interest in non-Muslims*, London, 1979

- (1) 自身の名は *Murūj*, § 522; cf. *Tanbīh* p.2。イブン・マスウードの子孫として、Ibn an-Nadīm, op.cit<1>, p.154; Yāqūt (d. 626/1229), *K. Irshād al-Ārīb ilā Ma'rīfat al-Adīb*, ed. D.S. Margoliouth, vol. V, London, 1929 (2nd ed), pp. 147-8; al-Kutubī (d. 764/1363), *Fawāt al-Wafayāt*, ed. Muhammad Muhyī ad-Dīn 'Abd al-Hamīd, vol. II, Cairo, 1951, p.57; as-Subkī (d. 771/1370), *Tabaqāt ash-Shāfi'iyyah al-Kubrā*, vol. II, Cairo, 1906, p.307; Ibn Taghrībirdī (d. 874/1470), *an-Nujūm az-Zāhirah*, vol. III, Cairo, 1963, pp.315-16などに記されている。更に Ibn Hazm (d. 456/1064), *Janharat Ansāb al-'Arab*, ed. 'Abd as-Salām Muhammad Hārūn, Cairo, 1962, p.197及び Ibn Khaldūn, *'Ibar*, vol. II, p.662には、Ibn Mas'ūdまでの系譜も挙げている。そして、マスウーディー自身はイブン・マスウードの祖先を Muḍar b. Nizār にまで遡らせる (*Tanbīh* p.294)。
- (2) al-Hudhalī というニスバは an-Najāshī (d. 450/1058) : *K. al-Rijāl*, Bombay, 1317AH, p.178; Ibn Hazm, op.cit<注1>, p.197; *'Ibar*, II, p.661。実家がクーファは Ibn Hazm, op.cit. p.411。バグダード生まれは *Murūj*, § 987; *Tanbīh*, pp.19, 42 (“我らの生まれた地で、我らが育った地”); cf. Yāqūt, op.cit <注1>, V, p.147。なお、マスウーディーの誕生を Miquel (p.203, note. 2) は283/896年頃に、 Khalidi (p.150) は280/893年頃に、 Shboul (p.2) は280/893年と285/898年の間に、 D.M. Dunlop (*Arab Civilization to A.D. 1500*, London, 1971, p.99) は277/890年と282/895年の間に置く。また、 'Alī Husnī al-Kharbūtī は287/900年頃に生まれたとしている (*al-Mas'ūdī*, Nawābigh al-Fikr al-'Arabī 38, Cairo, 1980, p.22)。注12参照。
- (3) 300年の記事は *Murūj*, § 2161。後代の略伝はおおよそ彼の没年や作品の名を記すだけで、彼の幼少年期や、彼の私生活、彼の生活手段などに関する情報は与えてくれない。現代の研究者、例えば、 al-Kharbūtī (op.cit <注2>, pp.23-24) は、マスウーディーの家族は彼の教育に熱心で、彼はバグダードで様々な教養を身につけたとしているが、 Dunlop (op.cit <注2>, p.99) は、マスウーディーが学問教育の通常の諸段階を経なかったように思えると言っている。
- (4) ペルシアの書物を調べたのは *Tanbīh*, p.106, *Murūj*, § 571。ゾロアスター教の神殿を訪れたのは *Murūj*, §§ 1403-4。
- (5) ペルシアを巡ったのは *Murūj*, § 709; *Tanbīh*, pp.49, 66, 74。ゾロアスター教の知識を得たのは *Tanbīh*, p.110。ホッラム教徒等と討論したのは *Tanbīh*, pp.353-4。
- (6) 中国の話を聞いたのは *Murūj*, § 385。
- (7) インド等の情報を得たのは *Murūj*, § 351。なお、 Miquel (p.121, note. 4) は両者の出会いはこれより後のことであった可能性を示唆する。インドへの道筋について、 Shboul (p. 6) は恐らくホーラーサーン地方からシンド地方へ進んだのではなかろうかと言う。cf. *Murūj*, § 218, § 386; §§ 417-8
- (8) 大臣達に会ったのは *Murūj*, § 218, §§ 417-8。象を目撃したのは *Murūj*, § 421。
- (9) al-Lār の地に滞在したのは *Tanbīh*, p.224, *Murūj*, § 269, §§ 515-6。マスウーディーはこの地で 303年と304年の雨期 (*shītā*) を見たと言い (*Tanbīh*, p.224)、 6月 (*tīrmāh*) はインドでは雨期だと述べている (*Murūj*, § 358) ので、 Shboul (p. 6) は、ヒジュラ暦304年は西暦916年7月5日に始まるところから、マスウーディーは916年6月、即ちヒジュラ暦303年12月に西デカンに到着したとする。
- (10) *Murūj*, § 168, § 185, § 269, § 415, § 423, § 515
- (11) チャウルでムスリムの商人達に会ったのは *Murūj*, § 515。キャンベイでバラモンと論議したのは *Murūj*, § 269。
- (12) インドの歴史は *Murūj*, § 168、宗教は *Murūj*, § 157、自然は *Murūj*, § 269, §§ 840, §§ 852-53, § 899。ペルシアとインドの旅行における彼の観察やインドでの重要な人物達との会見から考えると、彼はこの頃までには大人になっていたのではなかろうか。とすると、マスウーディーが生まれたのは 283/896頃だろうか。
- (13) オマーンと Qanbalū 島を往復したのは *Murūj*, § 244, § 246。アフリカ大陸に上陸したか否かは、この部

分の記述が伝聞の域を出ていない (*Murūj*, § 844ff) ので不明。また、マスウーディーは as-Sind, az-Zanj, as-Šanf, as-Šīn, az-Zābaj を踏破したと言っている (*Murūj*, § 4) が、実際は、後の3地域（チャンバ、中国、スマトラ）には行っていないのではなかろうか。尤も、Carl Brockelmann（“Al-Mas’ūdī,” EI.1, vol. III, p. 403）はマスウーディーがその先、セイロン島や中国方面に向かったとしているが、Shboul (p. 7) が指摘するように、根拠に乏しい。

- (14) Abū Khalīfah al-Jumāhī 下で学んだのは *Murūj* § 2242, cf. §§ 3264–67。尤も日付がないので、これより前のことかも知れない。Ibn Surayj の会に出席したのは、as-Subkī (op. cit <注 1>, II, p. 307) による。
- (15) Ibrāhīm b. Jābir に会ったのは *Murūj*, § 3326, cf. § 3324。
- (16) これ以前には、シリアへ行ったという記録がない。トリポリのレオから情報を得たのは *Murūj*, § 305。但し、ここではマスウーディーはレオとの会見を単に300/912以後と記している。レオは Zarāfah の奴隸 (ghulām) としても登場する (*Murūj*, § 739, *Tanbīh*, p. 180)。また、Abū ‘Umayr b. ‘Abd al-Bāqī から情報を得たのは *Murūj*, § 739, § 760。
- (17) Abū Zakariyyā Dankhā と議論を戦わしたのは *Tanbīh*, p. 155。
- (18) Ja’far b. Hamdān al-Mawṣilī に会見したのは *Murūj*, § 2907, § 3382。
- (19) カリマト派の指導者等に会ったのは *Tanbīh*, pp. 383–84。
- (20) ハッラーンでサービー教徒達と交わったのは *Murūj*, § 1395。ラッカでユダヤ教学者と議論を戦わしたのは *Tanbīh*, p. 113。
- (21) サーマーン朝將軍とシーア派宣伝員との戦闘を聞いたのは *Murūj*, § 3685ff。
- (22) *Tanbīh*, p. 113 には、マスウーディーは320年以前に没したとするユダヤ教徒の学者 Abū Kathīr と、バレスチナとヨルダンの地で議論したとある。ウマイヤ朝贊美のムスリム学者に会ったのは *Tanbīh* p. 336。このティベリアスの記事は324年とあるが、variant として314年が挙がっており、C. Brockelmann (op. cit <注 13> p. 403) や Shboul (p. 10) は後者をとっている。
- (23) ナザレのキリスト教会を訪れたのは *Murūj*, §§ 120–1。アクサー・モスクや聖墳墓教会を訪れたのは *Murūj*, § 126。ナブルスでサマリア人の情報を集めたのは *Murūj*, § 109。更には、ヨルダン渓谷や死海にまで足を延ばした可能性が大である (*Murūj*, § 87; *Tanbīh*, p. 73)。
- (24) ‘Abd Allāh b. Zayd に会ったのは *Murūj*, § 2779。ウマイヤモスクは *Murūj* § 2116、Mu’āwiyah の旧居と墓は *Tanbīh*, p. 302, *Murūj*, § 1772。また、パルミラ (Tadmur) やバアラバックの遺跡も訪れたらしい (*Murūj*, § 1403, § 1413)。
- (25) これらの地域の記事が *Murūj*, § 448, § 494, § 506 に見られるが、Shboul (p. 25) が調べたところでは320年以降の出来事を含んでおり、彼 (p. 12) はこの地方への旅を320/932と330/941の間に置いている。他方、Carra de Vaux (French trans. *Le Livre de l’Avertissement et la Révision*, Paris, 1897, p. IX)、Brockelmann (op. cit <注 13>, p. 403)、Miquel (p. 206)、al-Kharbūtī (op. cit <注 2>, p. 26) はカスピ海沿岸への旅を310/922から314/926までの間に置いている。カスピ海と黒海が別であることを確認したのは *Murūj*, § 296。コーカサス以北の情報を集めたのは *Murūj*, § 442ff。
- (26) メッカ・メディナを訪れたのは *Tanbīh* pp. 300–1。イエメン他の訪問は *Murūj*, § 1343, § 1376。Shboul はアラビアのペルシア湾岸は303/915–16年のペルシア諸州とインドへの旅と同時期に置かれうると、そして304/916年の Qanbalū からの帰りに南アラビアを旅行したかも知れないと言う (p. 12)。またアラビアの一部は306/918年–316/928年に旅行した可能性もあることを指摘する (p. 8)。
- (27) 公現祭を目撃したのは *Murūj*, § 780。オアシス地方の情報を得たのは *Murūj*, § 895。Shboul (p. 14) は330/941年以降マスウーディーの旅行はエジプトとシリアに限定されるようになったようだと言う。
- (28) 『黄金の牧場』の最初の33章を書き終えたのは *Murūj*, § 874。但し、『提言と再考』ではこの年に『黄金の牧場』をひとまず書き終えたとしている (*Tanbīh*, pp. 97, 155–56)。
- (29) アンティオキアで経典類を調べるなどしたのは *Murūj*, § 220, § 1293。
- (30) ジャバラで ‘Abd Allāh b. Wazīr に会ったのは332/944年と思われ (*Murūj*, § 306)、Shboul (p. 14) はア

- ンチオキアとその周辺地域への旅行中としている。
- (31) B. de Meynard (*Prairies d'Or*, vol. I, 1860, p. iv) 以下、C. Brockelmann (op. cit <注13> p.403)、Carra de Vaux (*Penseurs de l'Islam*, I, Paris, 1921, p.98)、Miquel (p.206) は、マスウーディーが332 or 333/943 or 944年にバストを訪れたとしているが、Shboul (p.13) は疑問を呈している (p.13)。また、M. Reinaud (*Introduction générale à géographie des orientaux*, Paris, 1848, p.LXV) は、マスウーディーがビザンツ帝国を訪れたと考えているが、それを裏書きするような証拠は見当らない。
- (32) ダマスクスでビザンツ使節の到着を目撃したのは *Tanbih*, p.194。Muhammad b. 'Abd Allāh から al-Muttaqī について聞いたのは、*Murūj*, § 3516ff。
- (33) フスタートでフランク人の王達の一覧表を見付けたのは *Murūj*, § 914。黄金の牧場（初稿）を書き上げたのは *Murūj*, § 3606。
- (34) アレクサンドリアで町の歴史を聞いたのは *Murūj*, § 834, § 836。上エジプトへ出掛けたのは *Murūj*, § 780, § 810。アスワンでシャーフィイーの情報を得たのは *Murūj*, § 2736。古代エジプトの情報を集めたのは *Murūj*, § § 812–13, § 822, § 892。
- (35) フスタートで地震を体験したのは *Tanbih*, p.48。『提言と再考』の最終稿を書き上げたのは *Tanbih*, p.401。『黄金の牧場』の増補版を完成させたのは *Tanbih*, pp.155, 401。
- (36) タバリーは *Tanbih*, p.267 他、aṣ-ṣūlī は *Murūj*, § 3364 他、Wakī' は *Tanbih*, p.293 他、Ibn Durayd は *Murūj*, § 764、Niftawayhi は *Murūj*, § 3391、Muhammad b. Sulaymān b. Dāwūd al-Minqarī は *Murūj*, § 2085, § § 2088–90, § 2092、Thābit b. Qurrah は *Tanbih*, p.73 他に、また、al-Jubbā'ī は *Tanbih*, p.396、Abū al-Qāsim al-Balkhī は *Tanbih*, p.396、al-Ḥasan b. Mūsā an-Nawbakhtī は *Tanbih*, p.396に、見られる。
- (37) この記事は Ibn Abī Usaybi'ah (d.669/1270), *K. 'Uyūn al-Anbā' fī Tabaqāt al-Atībā'*, ed. August Müller, vol. 1, Cairo, 1882, p.321による。
- (38) *Murūj*, § 43–46他（本稿III, p.20参照）から、マスウーディーのシーア派的傾向は明らかで、Charles Pellat のすぐれた研究 (“Mas'ūdī et l'imāmisme,” *Le shī'isme imāmite*, Paris, 1970, p.69–90) もある。また、マスウーディーのムウタズィラ派に対する共感は、ムウタズィラ派の学者達の伝記 (*Murūj*, § 2192, § 2418ff, § 2916, § 2918, § 3371 他) やこの派の詳しい紹介 (§ 2255ff) などから窺われる上、Subkī (op. cit <注1>, II, p.307) や Ibn Taghrī Birdī (op. cit <注1>, III, pp.315–16) はマスウーディーをムウタズィラ派と見ている。これは adh-Dhahabī (d.749/1348) の *Ta'rīkh al-Islām* によるものだろう。そして Ibn Ḥajar (d.853/1449) はマスウーディーをシーア派かつムウタズィラ派と見ているようだ (*Lisān al-Mīzān*, vol. IV, Hyderabad, 1913, pp.224–25)。更に、研究者達、例えば Miquel (p.205–08) はマスウーディーをイスマーイール派であったと主張し、Carra de Vaux はネオ＝プラトン主義がマスウーディー自身の哲学であることを強くほのめかした (*Le Livre de L'Avertissement et de la Revision*, Paris, 1897, p.vii)。
- (39) aṣ-Subkī (op. cit <注1>, II, p.307) はマスウーディーをシャーフィイー派に含む。10世紀の知識人の中には、シーア派、或いはその“シンバ”で、ムウタズィラ派の神学に傾倒する者が多く見られるが、彼らの採用する法学は、ハナフィー学派やシャーフィイー学派といった、いわゆるスンナ派法学の場合が普通である。例えば、先に触れたムカッダスィーは、シーア派的傾向を持ち、イスマーイール派の宣伝員の可能性もあるが、ムウタズィラ派の神学に共感を持ち、ハナフィー派の法学をとっている（拙稿“ムカッダスィーの『諸洲の知識に関する最良の区分の書』について”大阪外国語大学学報第64号、1984 pp.106, 116参照）。
- (40) Ibn Taghrī Birdī (op. cit <注1>, III, pp.315–16) が al-Musabbīhī (d.420/1029) に基づいて、マスウーディーの死去を345年6月（956年9月10日～10月10日）に置いている他、Khalidi (pp.151–52) によれば、adh-DhahabīやIbn al-'Imād (d. 1090/1679) も同年月としているようだ。その他、Yaqūt (op. cit <注1>, V, p.148) は346年という数値を挙げ (Ibn an-Nadīmに基づくと読めるが、後者の書 (op. cit <注1–1> にはない)、この数値は Ibn Ḥajar (op. cit <注38>, IV, p.224) にも

見られる。

- (41) 彼が商品や価格や他の商業活動に様々な場所で言及しており (*Muṣūj*, § 840, § 887, § 888他)、彼の情報提供者や旅仲間の多くが商人であった (*Muṣūj*, §§ 245–46, § 295, § 296, § 351, § 3586他)。

### III 彼の諸作品と『黄金の牧場』

マスウーディーは『黄金の牧場』と『提言と再考』といった歴史関係の著作より前に、次のような作品を著しているようだ<sup>(1)</sup>。それらは『諸宗教の原理に関する言論』*K. al-Maqdālāt fī Uṣūl ad-Diyānāt*、『生の秘密』*K. Sirr al-Hayāt*（宗教信条などを扱う）、『イマーム位に関する洞察』*K. al-Iṣtibṣār fī al-Imāmah {wa-Waṣf Aqāwīl an-Nās fī-hā}*、『イマーム位に関する精髓』*K. aṣ-Ṣafwah fī al-Imāmah*、『カトイーヤ派（12イマーム派）イマーム達の名前に関する説明の書簡』*Risālat al-Bayān fī Asmā' al-A'immah al-Qat'iyyah {min ash-Shū'ah}*、『宗教の原理に関する解説』*K. al-Ibānah 'an (fī) Uṣūl ad-Diyānah*といった宗教関係（法学・神学など）、すなわちアラブ固有の“伝統的”学問と目される分野から、『問題と経験』*K. al-Qaḍāyā wa't-Tajārib*（主に生態学を扱う）、『{政治に関する} 7題』*K. ar-Ru'ūs as-Sab'iyyah {fī's-Siyāsāt}*、『段階』*K. az-Zulaf*（自然哲学）など、外来（特にギリシア起源）の“純理的”諸学（哲学・自然科学など）関係まで、多方面にわたる作品である<sup>(2)</sup>。このことから、彼が当時の殆ど全ての学問に关心を持ち、知的な面に関して、百科全書的であったことが窺われる。そして、諸学の最後に取り組んだと言われる歴史は、彼にとって終極の学であり、歴史こそ諸学の総合の上に打ち立てられるべきものであった<sup>(3)</sup>。彼の作品には、『預言者一家の情報に関する理知の庭園』*K. Ḥadā'iq al-Adḥhān fī Akhbār Āl (Ahl) (Bayt) an-Nabī {wa-Tafarruqi-him fī al-Buldān}*、『輝くばかりの歴史情報と預言者一家の情報に関する珍しい歴史伝承』*K. Mazāhir (Mazāhir) al-Akhbār wa-Tarā'iif (Zarā'iif) al-Āthār fī Akhbār Āl an-Nabī (Abī Tālib)*、『{全般的な歴史情報と各種の歴史伝承に関する} 諸会合の結合』*K. Waṣl al-Majālis {bi-Jawāmi' al-Akhbār wa-Mukhtalif al-Āthār}*といった“伝統的”分野のものもあるが、彼が最も力を注いだのは、外来のものも取り入れ、地理を含んだ“総合的な”人類史としての、以下に紹介する7作品であろう<sup>(4)</sup>。

それらの最初に著されたのものは、マスウーディーの全作品中、最大最長の書と思われる『時代の情報、そして過去の民やいにしえの世代や消え去った国々の上に時が引き起こした荒廃』*Akhbār az-Zamān wa-Man Abāda-hu al-Hidhān min al-Umam al-Mādiyah wa'l-Ajyāl al-Khāliyah wa'l-Mamālik ad-Dāthirah*（以下、『時代の情報』と略記）であろう<sup>(5)</sup>。この書は主にカリフ達や王達の時代に起こった出来事を記したものだが、世界創造の記述で始まり、ペルシア他の前イスラーム期ならびに非イスラーム世界の歴史や地理や文化を扱い、イスラーム期は恐らく年代期であり、様々な宗派やイスラーム法学派の見解を検討し、学者などの伝記を含み、

様々な学を詳しく扱うなど、カリフ達を軸に数多くの情報を含んでいたと推察される<sup>(6)</sup>。全体が30部に分かれ、第1部（fann）には、黒人（as-Sūdān）と彼らの居住地・慣習・歴史に関する情報も含まれており、第2部には、海洋と河川の起源に関する様々な理論も扱われており、第14部には、アダム（Ādām）が彼の子供達を互いに結婚させるに際して、いかに違反を避けようとしたのかに関する抨火教徒の考え方も示され、第30部には、アッバース朝とシア派（aṭ-Tālibūn）の反乱が詳しく記されていた<sup>(7)</sup>。その他、318/930年までのハワーリジュ（al-Khawārij、イスラームの党派）諸派の情報（歴史）の章（bāb）を始め、アブー・ターリブ家（Āl Abī Tālib、アリーの子孫達）に関する数多くの情報や、コソスタンチヌス皇帝（Qusṭāntīs）、ヒーラ（al-Hīrah、イラクのユーフラテス河岸にあった都市で、ここに都を置いたラフム族の王朝〈3世紀初頭～602（633）年〉を指す）やガッサーン〔族〕（Ghassān、彼らの王朝〈529年～581（636）年〉はダマスクス周辺域を拠点とした）の王達、ハッジャージュ（al-Hajjāj、95/714年没、ウマイヤ朝の軍人、政治家）や、バルマク家（al-Barāmikah、アッバース朝の宰相職などを132/750年～187/803年に務めた）、食客達（tufayliyyūn）、サッファール（as-Saffār）朝のヤアクーブ（Ya‘qūb b. al-Layth、265/879年没）と弟アムル（‘Amr、289/902年没）、宦官達（khadām）の情報などに関する情報も豊かで、更にはヒムヤルの王達（al-Adhwā’、イエメン、～6世紀）の末路、ネストリウス（Nastūrus）追放事件を始め、マルワーン2世（Marwān b. Muḥammad al-Ja‘dī、ウマイヤ朝カリフ、在位127/744年～132/750年）の年令、ムウタディド（al-Mu‘taḍid bi-llāh、アッバース朝カリフ、在位279/892年～289/902年）の幽霊事件等々の詳細も記されていたようである<sup>(8)</sup>。『黄金の牧場』はこの作品を要約したものであろうか<sup>(9)</sup>。

次に著されたのは『中間の書』*al-Kitāb al-Awsat*である<sup>(10)</sup>。この書は『時代の情報』と同様な内容を持ち、『時代の情報』よりは短く、『黄金の牧場』よりは長い作品と考えられる。イスラームとビザンツとの関係や、預言者の妻達の記述、シリア征服、バグダード建設にまつわる話、イドリース朝（balad Idrīs b. Idrīs、モロッコ、172/789年～364/974年）に関する情報、アミーン（Muhammad al-Amīn、アッバース朝カリフ、在位193/809～198/813年）がどのように殺害されたのかの意見の相違、332/944年までのウマイヤ朝の書記達とアッバース朝の宰相達の情報、同年までのハディース学者の伝などでは、『時代の情報』にない記事をも含んでいたのかも知れない<sup>(11)</sup>。

3番目に著されたのが、『黄金の牧場』の初稿（336/947年）で、本稿で取り扱うものである。この書に関しては、以下に詳しく紹介するが、『時代の情報』にも『中間の書』にもない新しい記事も含まれているようだ<sup>(12)</sup>。なお、『黄金の牧場』には、改定・増補され、365部（juz'）に分けられた第2稿（345/956年）があるようだが、現在は知られていない。

第4の書は恐らく『各種の知識と過去の時代に起こったこと』（*K. Funūn al-Ma‘ārif wa-Mā Jarā fi’d-Duhūr as-Sauālif*）で、やはり、前イスラーム期とイスラーム期の両方を扱っ

ていると考えられる。ローマ・ビザンツ皇帝達（mulûk ar-Rûm）の情報をはじめとするギリシア人（al-Yûnâniyyûn）とローマ・ビザンツの歴史や文化の記述が詳しく、チュルク（at-Turk）の西進の理由やイフリーキーヤ（Ifriqiyâ, 現チュニジアとアルジェリア東部）の歴史、預言者ムハンマドが各地の支配者達に派遣した使節達などに関する豊かな情報も提供しているようだ<sup>(13)</sup>。

第5の書は『諸学の財宝と過去の時代にあったこと』（*K. Dhakhâ'ir al-'Ulûm wa-MâKâna fî Sâlif ad-Duhâr*）で、第4の書と同様、ローマ・ビザンツの歴史に関して、ペルシアやイスラームとの戦争などの情報を含み、ペルシアのサトラップ達（mulûk at-Tawâ'if）に関する記述していたようだ<sup>(14)</sup>。

第6の地歴書は『過去の時代に起こったことの回顧』（*K. al-Istidhkâr li-Mâ Jarâ fî Sâlif al-A'sâr*）で、『提言と再考』の基になったものらしい<sup>(15)</sup>。サワード（as-Sawâd, 下メソポタミア）に関する章及びイラクの灌漑の記述を含み、コンスタンチヌス皇帝のキリスト教入信の理由をはじめとするローマ・ビザンツに関する詳しい情報を提供する他、預言者ムハンマドの遠征やアリーと子孫達の特質なども扱う<sup>(16)</sup>。第5の作品よりは大部のものではなかったろうか<sup>(17)</sup>。

そして7番目が『提言と再考』で、この作品は彼の全著作中、最後のものである<sup>(18)</sup>。内容は、この書の目的の記述に始まり、天体、四季、風、大地、7イクリーム（aqâlîm/iqlîm, 世界区分としての州）、5海洋、7民族、ペルシアの5層の諸王、ギリシア人の諸王、ローマ・ビザンツの諸王、ビザンツの領土、ムスリム側とビザンツ側の捕虜、アダムからムハンマドまでの世界史、諸民族の歴史を扱った後、ムハンマドの誕生からムティーウ（al-Mu'tî'）のカリフ時代（khilâfah）の345/956年までの歴史に進み、ムハンマドの誕生からヒジュラ（al-Hijrah, 聖遷）元年、ヒジュラ2～11年の各年、アブー・バクル（Abû Bakr）～アリー、ハサン（al-Hasan, アリーの子）の各カリフ時代、ムアーウィヤ～マルワーン2世の各時代（ayyâm）<sup>(19)</sup>（但し、ウマル2世はカリフ時代）、マルワーン2世殺害以後の後ウマイヤ朝、サッファーフ（as-Saffâh）からムティーウまでのアッバース朝カリフ時代（ムウタスィム、ムクタディル、ラーディーの各カリフ時代が詳しい）を扱っている。全83章からなり、『黄金の牧場』（全132章）の5分の1強の長さに当たる。全体の5分の1程が地理、残りの5分の4程が歴史の記述と言えるが、歴史のうち2分の1程を非イスラーム史が占めている。そして、ローマ・ビザンツの情報や、ムハンマドの伝記などは、『黄金の牧場』の記述よりも詳しい。『提言と再考』は脱線が極力抑えられた結果、『黄金の牧場』に比べて、無味乾燥のきらいはあるけれども、中身はより充実し、より論理的な作品となっている。また、それまでの記述の誤りを正しており、彼が既に著した作品の改正を常に心がけていたことを示す<sup>(20)</sup>。

さて、現在利用できる『黄金の牧場』は、

1章 この書の目的の概要

2章 この書が含んでいる諸章

- 3章 始まり、万物の創造、アダムからアブラハム（Ibrâhîm）までの人類の創造
- 4章 アブラハムと彼の時代に続くイスラエル人（Banû Isrâ'îl）の諸預言者・諸王の話
- 5章 ダビデ（Dâwud）の子ソロモン（Sulaymân）の子レハブアム（Arkhubu 'am）と彼の時代に続くイスラエル人の諸王の統治、諸預言者に関する情報の要約
- 6章 キリスト（al-Masîh, メシア）とムハンマドとの間の過渡期の人々
- 7章 インド人とその思想や諸王国の始まりや生活習慣や信仰儀礼に関する情報の要約
- 8章 大地と海洋、河川の始まり、山岳、7イクリームとそれを支配する星、その他
- 9章 海洋の移動と大河川に関する情報の要約
- 10章 アビシニアの（Habashî）海（＝インド洋）に関する情報、その大きさと分岐と諸湾について言われてきた事柄
- 11章 満潮と干潮に関する人々の意見の相違、それについて言われてきた事柄の概要
- 12章 ルームの（Rûmî）海（＝地中海）、その長さと幅と始まりと終わりについて言われてきた事柄の説明
- 13章 ポントゥス（Bunṭus）の海（＝黒海）、マエオティス（Mâyuṭis）の海（＝アゾフ海）、コンスタンティノープル（al-Qusṭântîniyya）の湾（＝ダーダネルス・ボスポラス両海峡とマルマラ海）
- 14章 デルバンド（al-Bâb wa'l-Abwâb）とハザル（al-Khazar）とゴルガーン（Jurjân）との海（＝カスピ海）、諸海全部の序列に関する情報の要約
- 15章 中国とチュルクとの諸王、アームール（'Âmûr, ゴメル？）の子孫の分散、中国とその諸王との情報、彼らの伝記・政治の概要、その他
- 16章 諸海と、それらの島や沿岸の諸驚異・諸民族や、諸王の序列や、その他に関する情報の要約
- 17章 カフカス（al-Qabkh）山、アラーン（al-Lân）やアヴァール（as-Sarîr）やハザルや種々のチュルクやブルガール（al-Bulghar）といった諸民族に関する情報、デルバンドや、彼らのまわりの諸王と諸民族に関する情報
- 18章 シリア人（as-Suryâniyyûn）の諸王
- 19章 モースルとニネヴア（Nînawâ）の諸王、即ちアッシリア人（al-Athûriyyûn）
- 20章 ナバタイ人（an-Nabat）他のバビロン（Bâbil）の諸王、即ちカルデア人（al-Kaldâniyyûn）
- 21章 第1期ペルシア人の諸王、彼らの伝記、彼らの情報の概要
- 22章 サトラピー（aṭ-Tawâ'if, 諸藩、諸州）とアルサケス家（al-Ashghân）の諸王、即ち第1期ペルシア人と第2期ペルシア人との間の者
- 23章 ペルシア人（Fâris）の系譜、そのことについて人々が言ってきた事柄
- 24章 サーサーン朝（as-Sâsâniyya）の諸王、即ち第2期ペルシア人、彼らの伝記、彼らの情報の概要

- 25章 ギリシア人の諸王、彼らの情報、彼らの系譜の始まりについて人々が言ってきた事柄
- 26章 インド人の地でアレクサンドロス（al-Iskandar）に起こった出来事の概要
- 27章 アレクサンドロス以後のギリシア人の諸王
- 28章 ローマ人（ar-Rûm）、彼らの系譜の始まりについて人々が言ってきた事柄、彼らの諸王の数と年史、彼らの伝記の概要
- 29章 キリスト教徒化した（mutanaṣṣir）ローマ人の諸王、即ちコンスタンティノープルの諸王、彼らの時代にあった事柄の瞥見
- 30章 イスラームの出現後、ロマヌス〔1世〕（Armanûs）即ち332年（＝西暦943年）の王までの〔東〕ローマ人の諸王
- 31章 エジプトとその情報、そのナイル（an-Nîl）と、諸驚異、諸王の情報
- 32章 アレクサンドリアの情報、その建設、諸王、諸驚異、この章に付隨した事柄
- 33章 黒人、彼らの系譜、諸種族の相違、住居の異なり、諸王の情報
- 34章 スラブ人（as-Saqâliba）、彼らの居住地、諸王の情報、諸族の分散、
- 35章 フランク人（al-Ifranja）とガリシア人（al-Jalâliqa）、彼らの諸王、彼らの情報やandalus（al-Andalus, イベリア半島のイスラーム支配地域）の民との戦いの概要
- 36章 ロムバルド人（an-Nûkubard）、彼らの諸王、彼らの居住地に関する情報
- 37章 アード人（‘Âd〔アラビアの民の名〕）、彼らの諸王、彼らの情報の瞥見、彼らの長寿に関する言られてきた事柄
- 38章 サムード人（Thamûd〔アラビアの民の名〕）、彼らの諸王、彼らの預言者サーリフ（Ṣâlih）、彼らの情報の瞥見
- 39章 メッカと、その情報、神殿の建設、ジュルフム人（Jurhum〔アラビアの民の名〕）他のそこを次々に支配した者、この章に付隨した事柄
- 40章 大地や諸国の描写に関する情報の概要、祖国への憧れ
- 41章 イエメン、イラーク、シリア、ヒジャーズ（al-Hijâz）と名付けられた意図に関する人々の意見の相違
- 42章 イエメン〔人〕、その系譜、そのことについて人々が言ってきた事柄
- 43章 イエメンと、トゥッバア達（at-Tabâbi‘a/at-Tubba‘〔古代南アラビアの王達の称号〕）他のその諸王、彼らの伝記と統治年数
- 44章 イエメン〔人〕他のヒーラの諸王、彼らの情報
- 45章 ガッサーン人他イエメン〔人〕のシリアの諸王、彼らの情報
- 46章 アラブ人（al-‘Arab）他の遊牧民、彼らが沙漠に住む理由、山地のクルド人（al-Akrâd）、彼らの系譜、彼らの情報の要約、その他この主題に関連した事柄
- 47章 ジャーヒリーヤ時代（al-Jâhiliyya）のアラブ人の諸宗教と思想、各地への分散、“衆の衆”（イエメンを支配し、メッカに迫ったアビシニア軍）の情報、アビシニア人

(al-Aḥābīsh) その他の事情、アブド・ル＝ムッタリブ ('Abd al-Muttalib)、その他この章に付隨した事柄

- 48章 靈魂と梟と腸内寄生虫に関する〔古代〕アラブ人の意見、それらに関する彼らの情報
- 49章 グール (ghilān/ghūl, 鬼) とその変身に関する〔古代〕アラブ人の言い伝え、そのことについて他の人々が言ってきた事柄、その他この章に付隨し、これらの主題に関連した事柄
- 50章 ハーティフ (hawātif/hātif, 姿の見えぬ声) とジン (jān/jinn, 精霊) に関する〔古代〕アラブ人やその他の者でそれを肯定する人々、否定する人々の言い伝え
- 51章 人相学や、卜占と鳥占い（共に、空を飛ぶ鳥に石を投げて左右どちらに行くかで吉凶を占う）、右曲がりまわりと左曲がり（共にガゼルや鳥の動きについて言われ、それぞれ吉と凶の兆）、その他に関する〔古代〕アラブ人の意見
- 52章 占い術と、その特徴、それについて人々が語ってきた情報、理性的な魂とそれ以外の魂との識別、眠っている者が見る夢について言われてきた事柄、この章に関連した事柄
- 53章 占い師達の情報の要約、サバア (Saba') とマアリブ (Ma'rib [共に南アラビアの地名] ) の地の大洪水 (sayl al-'Arim)、アズド人 (al-Azd [南アラビアの民の名] ) が諸国に分散し、国々に住んだこと
- 54章 アラブ人と非アラブ人 (al-'Ajam) の年と月、一致する点、異なる点
- 55章 コプトとシリア人との月、その名称の違い、暦についての要約、その他この主題に関連した事柄
- 56章 シリア人の月、ローマ人の月への合わせかたの説明、1年の日数、アンワー (anwā', 28宿の星の沈み) の知識
- 57章 ペルシア人の月、それに関連した事柄
- 58章 ペルシア人の曜日、それに関連した事柄
- 59章 アラブ人の年と月、日と夜の命名
- 60章 太陰暦の夜々についてのアラブ人の言、その他この主題に関連した事柄
- 61章 二つの光源（=太陽と月）のこの世界への影響についての言、それについて言われてきた事柄の要約、この章に関連した事柄
- 62章 世界、自然、空気、東・西・南・北の各部分の特徴、更には星の支配
- 63章 神聖な館、貴い神殿、火と偶像の館、インド人の信仰、星々、更には世界の驚異
- 64章 ギリシア人における神聖な館とその描写
- 65章 ローマ人の祖先達における神聖な館とその描写
- 66章 スラブ人における神聖な館とその描写
- 67章 ハッラーンの人他のサービア教徒の神聖な館と貴い神殿、その諸驚異とそれについての情報
- 68章 火の館の情報、その建築法、拝火教徒の情報、その建築に付隨した事柄
- 69章 世界の始めから我らの預言者ムハンマドの誕生までの歴史の概要、この章に付隨した事柄

- 70章 預言者 [ムハンマド] の誕生、彼の系譜、その他この章に付隨した事柄
- 71章 彼の伝導と、彼の聖遷までにあった事柄
- 72章 彼の聖遷、彼の死去までその時代にあった事柄の概要
- 73章 彼の誕生から彼の死去までにあった事柄・事情に関する情報
- 74章 彼が言い始めた、彼以前には人類の誰を通して保持されてこなかったことば
- 75章 アブー・バクル・アッ=シッディーク (aṣ-Ṣiddīq) のカリフ時代 (khilāfa)、彼の系譜、彼の情報と伝記の瞥見
- 76章 ウマル ('Umar) ・ブン・アル=ハッターブ (al-Khaṭṭāb) のカリフ時代、彼の系譜、彼の情報と伝記の瞥見
- 77章 ウスマーン ('Uthmān) ・ブン・アッファーン ('Affān) のカリフ時代、彼の系譜、彼の情報と伝記の瞥見
- 78章 アリー・ブン・アビー・ターリブのカリフ時代、彼の系譜、彼の情報の瞥見、彼の兄弟姉妹の系譜
- 79章 “駱駝の日”（アリーがバスラ近郊でカリフの対抗馬2人を敗った戦いの日）に関する情報、その始まり、その日に起こった戦い、その他
- 80章 イラークの民（=アリー軍）とシリアの民（=シリア総督ムーア・ウィヤ1世軍）との間にシッフィーン (Sīffīn [ユーフラテス上流の荒野名] ) で起こった事柄の概要
- 81章 二人の仲裁者、仲裁の始まり
- 82章 彼（=アリー）とナフラワーン (an-Nahrawān [チグリス下流の運河地帯名] ) の民即ち異端者達（=ハワーリジュ派）との戦い、この章に付隨した事柄
- 83章 アリー・ブン・アビー・ターリブの殺害
- 84章 彼のことばと敬神の瞥見、この主題に付隨した彼の情報
- 85章 アル=ハサン・ブン・アリー（アリーの子アル=ハサン）のカリフ時代、彼の情報と伝記の瞥見、
- 86章 ムーア・ウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン (Abī Sufyān) ムーア・ウィヤ [1世] の時代 (ayyām)、彼の情報の瞥見
- 87章 ムーア・ウィヤの性格と政治の要約、彼の珍しい情報の精選
- 88章 [ムハンマドの] 教友達 (aṣ-Ṣahāba) と彼らへの賛辞、アリー・ブン・アビー・ターリブとアル=アッバースと二人の徳
- 89章 ヤズィード (Yazīd) ・ブン・ムーア・ウィヤ・ブン・アビー・スフヤーン (ムーア・ウィヤ [1世] ) の子ヤズィード [1世] の時代
- 90章 アル=フサイン (al-Husayn) ・ブン・アリー・ブン・アビー・ターリブ（アリーの子アル=フサイン）の殺害、彼の家の者と支持者で殺された者
- 91章 アリー・ブン・アビー・ターリブの子孫の名

- 92章 ヤズィードの情報と伝記の瞥見、彼の珍しい行動の一部、ハッラ（al-Harrah [メディナ郊外の戦場名]）その他であった事柄
- 93章 ムアーウィヤ・ブン・ヤズィード（ヤズィード [1世] の子ムアーウィヤ [2世]）、マルワーン・ブン・アル=ハカム（al-Hakam）マルワーン [1世]）、アル=ムフタール（al-Mukhtâr）・ブン・アビー・ウバイド（Abî ‘Ubayd）、アブドッラーフ（‘Abd Allâh）・ブン・アッ=ズバイル（az-Zubayr）の時代、彼らの情報と伝記の瞥見、彼らの時代にあった事柄の一部
- 94章 アブド・ル=マリク（‘Abd al-Malik）・ブン・マルワーン（マルワーン [1世] の子アブド・ル=マリク）の時代、彼の情報と伝記の瞥見、アル=ハッジャージュ・ブン・ユースフ（Yûsuf）と彼の行動、彼の珍しい情報
- 95章 アル=ハッジャージュの情報の要約、彼の演説、彼の行動の一部に見られた事柄
- 96章 アル=ワリード（al-Walîd）・ブン・アブド・ル=マリク（アブド・ル=マリクの子アル=ワリード [1世]）の時代、彼の情報と伝記の瞥見
- 97章 スライマーン（Sulaymân）・ブン・アブド・ル=マリク（アブド・ル=マリクの子スライマーン）の時代、彼の情報と伝記の瞥見
- 98章 ウマル・ブン・アブド・ル=アズィーズ（‘Abd al-‘Azîz）・ブン・マルワーン・ブン・アル=ハカム（マルワーン [1世] の孫ウマル [2世]）のカリフ時代、彼の情報と伝記と敬神の瞥見
- 99章 ヤズィード・ブン・アブド・ル=マリク（アブド・ル=マリクの子ヤズィード [2世]）の時代、彼の情報と伝記の瞥見
- 100章 ヒシャーム（Hishâm）・ブン・アブド・ル=マリク（アブド・ル=マリクの子ヒシャーム）の時代、彼の情報と伝記の瞥見
- 101章 アル=ワリード・ブン・ヤズィード・ブン・アブド・ル=マリク（ヤズィード [2世] の子アル=ワリード [2世]）の時代、彼の情報と伝記の瞥見
- 102章 ヤズィード・ブン・アル=ワリード・ブン・アブド・ル=マリク（アル=ワリード [1世] の子ヤズィード [3世]）と彼の兄弟イブラーヒーム（Ibrâhîm）の時代、二人の時代にあった事柄の瞥見
- 103章 イエメン人（al-Yamâniya, 南アラブ諸部族）とニザール人（an-Nizâriyya, 北アラブ諸部族）の間の対抗意識の原因、そのことがウマイヤ家（Banû Umayya）にもたらした不穏
- 104章 マルワーン・ブン・ムハンマド・ブン・マルワーン・ブン・アル=ハカム（マルワーン [1世] の孫マルワーン [2世]）の時代
- 105章 ウマイヤ家が支配した期間と年数
- 106章 アッバース家の（al-‘Abbâsiyya） [高貴な] 王朝、マルワーンと彼の殺害についての

### 情報の瞥見、彼の戦争と伝記の概要

- 107章 アッ=サッファーフのカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 108章 アブー・ジャアファル (Abū Ja‘far) ・アル=マンスール (al-Maṇṣūr) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 109章 アル=マハディー (al-Mahdī) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 110章 アル=ハーディー (al-Hādī) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 111章 アッ=ラシード (ar-Rashīd) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 112章 バルマク家、彼らの情報、彼らの時代に彼らに見られた事柄
- 113章 アル=アミーンのカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 114章 アル=マアムーン (al-Ma’mūn) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 115章 アル=ムウタスィム (al-Mu‘taṣim) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 116章 アル=ワースィク (al-Wāthiq) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 117章 アル=ムタワッキル (al-Mutawakkil) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 118章 アル=ムンタスィル (al-Muntaṣir) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 119章 アル=ムスタイーン (al-Muṣṭa‘īn) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 120章 アル=ムウタッズ (al-Mu‘tazz) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 121章 アル=ムフタディー (al-Muhtadī) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 122章 アル=ムウタミド (al-Mu‘tamid) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 123章 アル=ムウタディドのカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 124章 アル=ムクタフィー (al-Muktafi) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見
- 125章 アル=ムクタディル (al-Muqtadir) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代

## にあった事柄の瞥見

126章 アル＝カーヒル (al-Qâhir) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見

127章 アッ＝ラーディー (ar-Râqî) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見

128章 アル＝ムッタキー (al-Muttaqî) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見

129章 アル＝ムスタクフィー (al-Mustakfî) のカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見

130章 アル＝ムティーウのカリフ時代、彼の情報と伝記の要約、彼の時代にあった事柄の瞥見

131章 聖遷から現在、即ちこの書を書き終えた336年5月（＝西暦947年11—12月）まで、第2期の歴史の概要

132章 イスラームの最初から335年（＝西暦946年）までに、人々を連れて巡礼に行った者という内容を持っている<sup>(21)</sup>。

こうした『黄金の牧場』は、現存する写本の数と出所が指示示すように、何度も書き写され、al-Bakrî (487/1094年没)、Yâqût (626/1229年没)、イブン・ハルドゥーン (808/1406年没)、al-Maqrîzî (845/1442年没) 他、アラビア語で著述した幾世代もの文人・学者によって次々と利用されてきた。一方、マスウーディーのこの作品自体も数多くの書物を利用している。第1章に彼が調べた Wahb b. Munabbih (110/728年或は114/732年没)、Ibn Ishâq (151/768年没)、al-Wâqidî (207/823年没)、al-Jâhîz (254/868年没)、az-Zubayr b. Bakkâr (256/870年没) など、85人の名や書物名が挙がっている他、この書の中にはそれ以外の書物への言及が数多く見られる。

マスウーディーは『黄金の牧場』の始めに、家に留まり、たまたま入って来る情報で満足している者は、広く旅をし、自分で詳細な貴重な情報を搜し出す者とは比べられないと言っているが、まず、この書の最初の方の諸章で目につくのは、自らの旅行体験に裏打ちされた地理情報が歴史記述の間に挿入されていることである。彼は歴史と地理をアラビア文学における2つの相互に密接な関係にあるジャンルと認識していたようであり、人間の歴史とはその舞台となる地理環境の記述なしには完全なものにならないと感じ、このように地理的コンテキストの中に歴史的出来事を置くのではなかろうか。これは後に言及するこの書のアダブ (adab, 教養人文学) 的性格の反映とも言える。

そして、この書には、イスラーム世界のみならず、既知の非イスラーム世界に対するマスウーディーの関心の強さと偏見のなさもはっきりと認められるが、この点がマスウーディーをムスリム歴史家の多くから区別する第2の特徴ではなかろうか。人類創造以来のイスラームの歴史以外は殆ど視野にない者もいる一方で、彼は前イスラーム期のアラビアやペルシア及び非イスラーム

闇の歴史も人類の歴史として考慮すべきであるとの観点に立っていた。啓示宗教を持っていない人々がかつて王国を築き、現に築いている事実を認め、神の啓示（天啓）による歴史は、人間の理性による歴史——マスウーディーに従えば、インドや中国などの歴史——を補って初めて完全になると彼は考えている。神の存在を信じながらも、彼は歴史については、神と人間の因果ではなく、人間界の因果でとらえようとした。この考え方には、歴史における神の途切れることのない活動と同時に、ギリシア・インドから学んだ物理的宇宙の自然法則をも認めるという彼の姿勢に通じる。

その上、後に『黄金の牧場』第3章の解説の項で詳しく取り上げるが、神の光がムハンマドの子孫に伝わっていくと明記するとか、アリーに関する出来事が預言者ムハンマドの伝記よりも強調される、或はアリーの息子ハサンのカリフ位を記述する、更にはウマイヤ朝期の記述にはウマル2世を除いてカリフ位が登場しないといったように、シア派の史観が出ている。ここでは、矛盾が更に深まるように映るが、一方ではシア派の神智論と神によるアリーの家族のための“不可思議な”介入とを信じ、他方ではギリシア・インドの哲学的伝統の中で理解される、宇宙の組織的かつ合理的な秩序を信じていたようだ。

更には、タバリーと比較することによって、よくわかる特徴がある。タバリーの書は著者自身による歴史叙述ではなく、およそ記されたもの、或は語り継がれたものを問わず、それまでに存在したあらゆる歴史的伝承の集大成を意図したものである。それゆえ、同一の出来事の異なった見解が次々と挙げられており、読者に判断の下駄を預けている。ここで、様々な話がまとまるのは“年”という単位の下であり、ある意味では締まりのない作品となっている。

マスウーディーはタバリーを高く評価し、彼の作品を大いに利用している。しかし、叙述方法に関しては、ある出来事に対して、様々な見解の中から一つの見解だけを選び、様々な出来事を年代順に並べ、物語体の歴史をとる。彼が用いた資料の一字一句には殆ど囚われず、簡潔な読み易いものを目指した。マスウーディーは出来事を原因・結果の連続的な流れ（どの出来事も次の出来事の序であり、前の出来事の結である）としてとらえる。これはアリストテレス他ギリシアの自然学者の方法に影響されたものかも知れない。

タバリーとの比較をまとめると、まず、タバリーは出来事を“年”別に記録し、マスウーディーは歴史を“主題”別に扱い、タバリーのwa（“そして”）構文（集積的）に対して、マスウーディーはfa（“それで”）構文（継起的）を採用する。歴史における真実を追い求めるために、マスウーディーは当時の学問に対する自らの幅広い知識を頻繁に活用し、タバリーのように情報の正しい伝達を主目的とする歴史家とは異なった姿勢を示す。歴史における正確さとは、マスウーディーにとっては、自然現象の容認された法則を背景に歴史の事象を検討して、その真偽を判断すること、それゆえ、人は常に彼の地理的環境に照らして、判断されることを意味した。しかしながら、タバリー同様、自らの創造物の行く末を導くことによって自らの存在を明らかにする神によって世界は支配されているという見解を持ち続けていた。即ち、歴史の全過程は、人類を創造し、人類を救済に導くための神の偉大な計画の一環であり、人類史を、天地の創造から最後の審判に至

る時間の経過のうちにとらえるのである。

その他、『黄金の牧場』にはアダブ的性格がよく現れている。まず、この書を細かく見していくと、地歴書と言うより百科全書的な歴史作品と言った方がより正確であり、マスウーディーは地誌、博物誌、伝記、詩集といった、それぞれ独立した範疇とみなされがちであったものを一つの作品の中に組み込んでいる。歴史の素材が自然であり、歴史を形成するものが人間であれば、“総合的な”歴史書には自然と人間にに関するあらゆる分野の記述が含まれることは当然かも知れない。

また、この書には随所にあらゆる種類の余談 (sawānih, 逸話・ジョーク・奇談などに見られる) が挿入されている。“真面目な”歴史家には本文への邪魔物と映るかも知れないが、一般織字層を対象とするアダブでは、出来事の無味乾燥な列挙にすぐ飽きてしまう読者達に対して、こうした脱線はめり張りをつける上でも必要不可欠な要素である。同様な技法は、更に本文にも見られ、例えば、第113章中のアミーンとマアムーンの内戦に関する一連の記述は、バグダードの或る盲目の詩人による各詩が核となって進んでゆき、読者を飽きさせない。

アラビア語による歴史作品の殆どは3人称で書かれており、著者がどんな人物かを感じ取ることは難しい。それに対して、マスウーディーは1人称を用い（但し、自分自身に言及する時に、エディトリアルの“我々”を用いることが多い）、読者は読み進むにつれ、この著者がどのような人物なのかが次第にわかってくる。P.LundeとC.Stoneに従えば、マスウーディーは好奇心旺盛で、心が暖かく、雅量があり、自惚れが強く、法曹家を毛嫌いするという人物像を示す。ちなみに、マスウーディーはなめらかで飾り気のないアラビア語を使い、語彙が豊かである。

最後に『黄金の牧場』を高く評価したイブン・ハルドゥーンの説を紹介する。彼は、マスウーディーの上述した特徴の2つ、即ち、マスウーディーが歴史と地理の間に強いつながりを認めしたことと、マスウーディーがアラブ以外の民族、イスラーム以外の宗教、そして遠隔の土地に関して特別な関心を持ったこととを強調し、このことによって、Iで紹介したように、「マスウーディーの書は歴史家のための基本的参考書・・・となった」と述べる。そこで自身は「マスウーディーが彼の時代のために書いたように、今の時代のために書かねばならない。そうすれば、それはかならずや後世の歴史家が見做うべき手本となるであろう」。しかし、この15世紀のアラブ人学者は10世紀のこの先人と同じ広範囲をカバーすることはできないことを自覚した。というのも、イブン・ハルドゥーンが認めるように、「マスウーディーは自著で述べているように、広範囲にわたる旅行と各地での遍歴によって、記述を完全なものにさせた」からである。

イスラームにおける歴史記述におけるマスウーディーの重要性、そしてイブン・ハルドゥーンに対する彼の影響は、恐らく主に世界の歴史および他の民族の取り扱い方にある。即ち、マスウーディーがイスラームにおける歴史記述の地平を広げたことにあると言えるであろう。

この『黄金の牧場』を見て、M.d'Ohssonはマスウーディーに“アラブ人のヘロドトス”、G.Sartonは“ムスリムのプリニウス（プリニー）”の名を冠したが、マスウーディーは旅行者、

地理家、歴史家、文人と言うだけでなく、ヒューマニスティクな態度とユニバーサルな見方を持った多才な学者として、ある目立った位置を占める。即ち、マスウーディーはその生涯と作品が当時のイスラームの知的生活の人文的側面を生き生きと映し出す卓越したアラブ人学者の一人であったのだ。

注

- (1) 著作活動の開始は315/927年以後らしい (Khalidi, p.150)。
- (2) 『諸宗教の原理に関する言論』は *Murūj*, §§ 5, 783, 1138, 1205, 1715, 1945, 1994, 2078, 2225, 2256, 2291, 2399, 2420, 2741, 2800, *Tanbīh*, pp.154, 161–62、『生の秘密』は *Murūj*, §§ 5, 533, 988, 1195, 1248, 2800, 3156, *Tanbīh*, pp.155, 353、『イマーム位に関する洞察』は *Murūj*, §§ 6, 1138, 1463, 1952, 2190、『イマーム位に関する精闢』は *Murūj*, §§ 6, 1138, 1463, 1952、『カトイーヤ派イマーム達の名前に関する説明の書簡』は *Murūj*, §§ 2532, 2798, *Tanbīh*, p.297、『宗教の原理に関する解明』は *Murūj*, §§ 5, 212, 2256, *Tanbīh*, p.354、『問題と経験』は *Murūj*, §§ 369, 705, 815, 817, 846, 2247、『7題』は *Murūj*, §§ 928, 1222–23, 1232, 1336、『段階』は *Murūj*, §§ 533, 630, 928, 1325, 1335に登場する。
- (3) *Murūj*, § 989では、史学（‘ilm al-akhbār）の価値を強調し、§§ 5–6では、歴史書を諸学術の作品の最後に著したように取れる。Khalidi, p.32参照。また、F.Rosenthalに従えば、マスウーディーは世界のあらゆる物質的現象を歴史の下に扱おうとした (*A History of Muslim Historiography*, 2nd ed., Leiden, 1968, p.136)。
- (4) 『預言者一家の情報に関する理知の庭園』は *Murūj*, §§ 1013, 1943, 2506, 2742, 3023、『輝くばかりの歴史情報と預言者一家の情報に関する珍しい歴史伝承』は *Murūj*, §§ 1755, 1677, 3032、『諸会合の結合』は *Murūj*, §§ 3014, 3428, 3608, *Tanbīh*, p.333に登場する。
- (5) *Tanbīh*, p. 2は、『時代の情報』が最初に著されたことを物語る。この書のフルネームは *Murūj*, § 50, § 892, § 3605, *Tanbīh*, pp. 1, 2, 144, 175, 400他に登場する。
- (6) カリフや王達の時代の出来事を記したもの (*Murūj*, § 3606) 世界創造 (*Murūj*, §§ 60, 61) 前イスラーム・非イスラーム (*Murūj*, §§ 137, 274, 407, 424, 464, 733, 738, 743, 1082他) 年代記 (*Murūj*, §§ 1498, 3240) 宗派 (*Murūj*, §§ 212, 2076, 非イスラーム § 3201) 法学派 (*Murūj*, § 2921) 学者伝 (*Murūj*, §§ 15, 3353) 諸学 (*Murūj*, § 1369) カリフ達 (*Murūj*, 正統カリフ § 1523, 他、ウマイヤ朝カリフ § 1877, 他、アッバース朝カリフ § 2434, 他) 多くの情報 (*Murūj*, §§ 1–2)
- (7) 30部 (*Murūj*, §§ 299, 304, 880)、第1部 (*Murūj*, § 880)、第2部 (*Murūj*, §§ 299, 304, 776)、第14部 (*Murūj*, § 50)、第30部 (*Murūj*, § 2741, cf. シア派の活動 §§ 3334, 3433)
- (8) ハワーリジュ派の章 (*Murūj*, § 1737, cf. § 1993)、アブー・ターリブ家 (*Murūj* §§ 3032, 3037, 3080, 3105, *Tanbīh*, p.257)、コンスタンチヌス帝 (*Murūj* § 738)、ヒーラ (*Murūj* § 1075)・ガッサーン (*Murūj* § 1082)、ハッジャージュ (*Murūj* § 2112)、バルマク家 (*Murūj* § 2618)、食客 (*Murūj* § 3129)、サッファール朝 (*Murūj* § 3176)、宦官 (*Murūj* § 3288)、ヒムヤル (*Murūj* § 130)、ネストリウス (*Murūj* § 748)、マルワーン2世 (*Murūj* § 2274)、ムウタディド (*Murūj* § 3320)
- (9) Shboul (p.73) は、『黄金の牧場』は『時代の情報』と『中間の書』にないと思われる記事を含むこと、文学的逸話や個人的観察・体験の記事などに力点を移すことから見て、『黄金の牧場』は前二作品の要約と見なすのは正しくないと言う。
- (10) *Murūj*, § 3, *Tanbīh*, p.2 (第3の書以下の順番も、ここに記されている)
- (11) イスラーム・ビザンツ関係 (*Murūj* §§ 756, 763, 769)、預言者の妻達 (*Murūj* § 1476)、シリア征服 (*Murūj* § 1668)、バグダード建設 (*Murūj* § 2382)、イドリース朝 (*Murūj* § 2405)、アミーン殺害 (*Murūj* § 2687)、書記と宰相達 (*Murūj* § 2986)、ハディース学者伝 (*Murūj* § 3069)、『時代の情報』

にない記事(その他*Murūj* §§ 880, 2150)

- (12) 『中間の書』の次とある(*Murūj* § 2112, cf. § 3605)。新しい記事が含まれ(*Murūj* § 1575)、具体的には、ワリード(§ 2150)、バルマク家(§ 2618)、食客達(§ 3129)、サッファール朝のヤアクーブ・アッライスと弟アムル(§ 3176)に関する情報などようだ。
  - (13) ギリシアとローマ・ビザンツ(*Tanbīh*, pp.121, 144, 151, 153, 158, 160, 174, 182)、チュルクの西進(*Tanbīh*, p.180)、イフリーキーヤ史(*Tanbīh*, p.333)、預言者の使節達(*Tanbīh*, p.261)
  - (14) 対ペルシア・イスラーム(*Tanbīh* pp.175-76)、サトラブ達(*Tanbīh* p.97)
  - (15) 『提言と再考』の基とある(*Tanbīh* pp.84, 97, 176, 401)
  - (16) サワード章(*Tanbīh*, p.102)、イラーク灌漑(*Tanbīh*, pp.53-54)、ローマ・ビザンツ(*Tanbīh*, pp.128, 133, 137, 144, 176)、預言者の遠征(*Tanbīh* pp.271, 272, 279)、アリー達の特質(*Tanbīh* p.301)
  - (17) Khalidi(p.156)はその理由として『提言と再考』での言及が第5の書より多いことを挙げる。
  - (18) 最後の書(*Tanbīh* p.5)
  - (19) 本稿p. 20参照
  - (20) 『提言と再考』が誤りを正している例として次のようなものがある。コンスタンチヌスがキリスト教徒になったのは、『黄金の牧場』では統治の1年後(§ 734)、或は統治の17年後に開かれたと言うニカエアの会議の際(§ 737)となっているが、『提言と再考』では20年以上の統治の後にキリスト教徒となった(pp.142-13)とある。また、コンスタンチノーブルは『黄金の牧場』では東と北を海に囲まれている(§ 739)としているが、『提言と再考』では三方を海に囲まれている(p.139)と変わっている。南部イラークに対するカルマト派の軍事行動に関して、『黄金の牧場』では301年1月1日にバハーレーンの主権者がバスラに入り、当地のアミールを殺したとなっている(§ 3433)が、『提言と再考』では311年4月と直っている(p.380)。
- なお、彼の著書には、その他『黄金の牧場』と『提言と再考』に言及されているものとして、『宗教(イスラーム)の原理に関する証拠の首飾り』*K. Nazm al-Adīlah fī Uṣūl al-Millah* (*Murūj* § 5, *Tanbīh* pp.4-5)、『心の医術』*K. Tibb an-Nuṣūs* (哲学・科学 *Murūj* §§ 988, 1247)、『マスウーディー情報』*al-Akhbār al-Mas'ūdiyyāt* (歴史 *Tanbīh* pp.259, 333)、『理知と完全』*K. an-Nubā' wa'l-Kamāl* (哲学・科学 *Murūj* § 1247)、『原理と構造』*K. al-Mabādī' wa't-Tarākīb* (哲学・科学 *Murūj* § 1325)、『必須の戒律に関する義務』*K. al-Wājib fī al-Furūq al-Lawāzim* (*Murūj* § 1952)、『ハーリジー派の諸派だけの支え』*K. al-Intiṣār {al-Mufrad li-Firaq al-Khawārij (khāṣṣ bi-l-khawārij wa-firaqihim)}* (*Murūj* § 2190)、『{神学に関する}取り戻し』*K. al-Iṣṭirjā' {fi'l-Kalām}* (*Murūj* § 1223)、『厭うべき要求』*K. ad-Da'āwā (i) ash-Shanī'ah* (宗教 *Murūj* § 1195)、『輝かしい書』*al-Kitāb az-Zāhī* (歴史 *Murūj* § 1463)、『法規の原理に関する指針の首飾り』*K. Nazm al-A'lām fī Uṣūl al-Aḥkām* (*Tanbīh* pp.4-5)、『靈魂の休息』*K. Rāḥat al-Aruḍah* (歴史 *Murūj* § 819)、『諸王国と諸軍隊との運営に関する宝石の首飾り』*K. Nazm al-Jauḥār fī Tadbīr al-Mamālik wa'l-Asākir* (歴史 *Tanbīh* pp.400-01)、『宗教の財宝と諸界の秘密』*K. Khazā'in ad-Dīn wa-Sirr al-Ālamīn* (*Tanbīh* pp.101, 161-63, 395)、『諸信条と諸宗教に関する質問と弁明』*K. al-Masā'il wa'l-Ilal fī al-Madhbāh wa'l-Milāl* (*Tanbīh* pp.4-5, 155)、『非アラブ人騎士達の死』*K. Maqātil Fursān al-'Ajām* (歴史 *Tanbīh* p.102)、『諸王朝の盛衰および諸見解と諸宗教の変化』*K. Taqallub ad-Duwal wa=Taghayyur al-Ārā' wa'l-Milāl* (歴史 *Tanbīh* p.334)がある。

[(21)以下の注は次回に掲載する]

(1990. 9. 18 受理)